

ケアの形而上学的分析

中山 康雄 (Yasuo Nakayama)

大阪大学大学院人間科学研究科

最近、ケア (caring) について倫理学や社会学の観点から分析されることが多くなった。このような状況との関連で、本発表では、ケア概念を、存在論を基盤にして分析することを試みる。このアプローチにより、ケアに関わる複雑な関係性の全体像を描くことが可能になることを示したい。この議論を展開するにあたり私は、四次元メレオロジー (Four-dimensional Mereology) の体系を前提にする。この四次元メレオロジーの体系は、〈四次元主義+メレオロジー〉という存在論的立場を表現している (中山 2009, Nakayama 2017)。

Mayeroff (1971) によれば、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである」(邦訳 p. 13)。本発表では、ケアを広い意味でとらえ、「システムのケア」について考察する。また、システム概念については、明示的定義を与えない。ひとり人間もシステムであり、機械やソフトウェアもシステムである。そして次のように特徴づけられるシステムの自律性 (autonomy) が、本発表の軸となる概念である。

- (1) [システムの自律性] システム S が自律的であるのは、 S が S の外部からの援助を受けずに存続できる状態にあるとき、かつ、そのときに限る。

このとき、「システムのケア」は次のように規定できる。ただしここでは、生物体としてのシステムに限定されたケア概念が説明されている。

- (2) [システムのケア] システム S_1 に対するケアは、 S_1 が自律的に生存できないときに、 S_1 を部分として含んだシステム S_2 を形成し、 S_2 の中で S_1 が生存できるようにすることである。ここで、 $S_3 = S_2 - S_1$ というように システム S_3 を定義しよう。つまり、「+」がメレオロジー的和を意味するとき、 $S_2 = S_1 + S_3$ なるような S_3 が導入される。このとき、システム S_1 はケアされる対象であり、システム S_3 はケアする対象である。

通常、ケアするシステム S_3 は自律的である。つまり、 S_3 は自らをケアすることによって生存を維持できている。生物体の場合、ケア行為に関わるのは、呼吸、栄養補給、および、排泄である。典型的な場合には、ケアするシステム S_3 は成人の健常者であり、ケアされるシステム S_1 は乳幼児や要介護の高齢者や障がい者である。場合によっては、 S_3 は医療関係者であり、 S_1 は治療を受ける人である。現代では、ケアに経済的援助も含まれてくることに注意したい。食物を手に入れるためにも、すでに、経済的

基盤が必要になる。ケアされるシステム S_1 を経済的に支援するためには、システム S_2 全体の経済的援助を考えるべき場合が多くなる。

規定 (2) に現れるケアするシステム S_3 は、〈拡張された行為主体〉でもありうる (中山 2011, Nakayama 2013)。この〈拡張された行為主体〉の概念は、次のように規定できる (中山 2016: p. 88f)。

- (3a) [元来の行為主体] 元来の行為主体は、行為主体である。行為主体は四次元的個物である。
- (3b) [行為主体と道具] A が行為主体のとき、〈[物体 B をコントロールしているという状態にある A の時間的部分] + [A によりコントロールされている状態にある B の時間的部分]〉という融合体は、行為主体である。
- (3c) [共同行為の主体] 複数の行為主体 A_1, \dots, A_n がひとつの共同行為を遂行するとき、〈 $A_1 + \dots + A_n$ 〉は行為主体である。
- (3d) (3a) と (3b) と (3c) のいずれの条件も満たさないものは、行為主体ではない。
- (3e) 元来の行為主体ではない行為主体のことを、「拡張された行為主体」と呼ぶことにする。

ケアにおいては、ケアされるシステム S_1 がシステム S_2 全体の中心を形成する。このようなとき、 S_2 の存在意義は S_1 の生存維持にある。システム S_1 は、単独では生命活動を維持することが困難な状態にあり、システム S_2 はシステム S_1 の生命活動維持のために構造化される。このようなシステム構造形成は、「人物中心のケア (person-centered care)」と呼ばれている姿勢に対応する。

ケアにおいては、システムが入れ子になっている。システム S_2 は、ケアされるシステム S_1 とケアするシステム S_3 を包摂するひとつのシステムである。つまり、システムは、その内部に部分システムを含んでいる。

C. Gilligan や E. F. Kittay は、ケアの倫理学を主張し、依存的存在者の存在意義を主張した。本発表では、そのような議論を展開するためにも、ケアするシステムについての存在論的探求が必要なことを指摘する。

参考文献

- Mayeroff, M. (1971) *On Caring*, Harper & Row Publishers. (田村真・向野宣之訳 (1987) 『ケアの本質』 ゆみる出版)
- Nakayama, Y. (2013) "The Extended Mind and the Extended Agent," *Procedia Social and Behavioral Sciences*, vol. 97, Elsevier, pp. 503-510.
- Nakayama, Y. (2017) "Event Ontology based on Four-dimensionalism," 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 vol. 43, pp. 175-192.
- 中山康雄 (2009) 『現代唯名論の構築 — 歴史の哲学への応用』 春秋社
- 中山康雄 (2011) 「形而上学から科学技術論へ」 戸田山和久・出口康夫 (編) (2011) 『応用哲学を学ぶ人のために』 世界思想社, pp. 60-70.
- 中山康雄 (2016) 『パラダイム論を超えて — 科学技術進化論の構築』 勁草書房